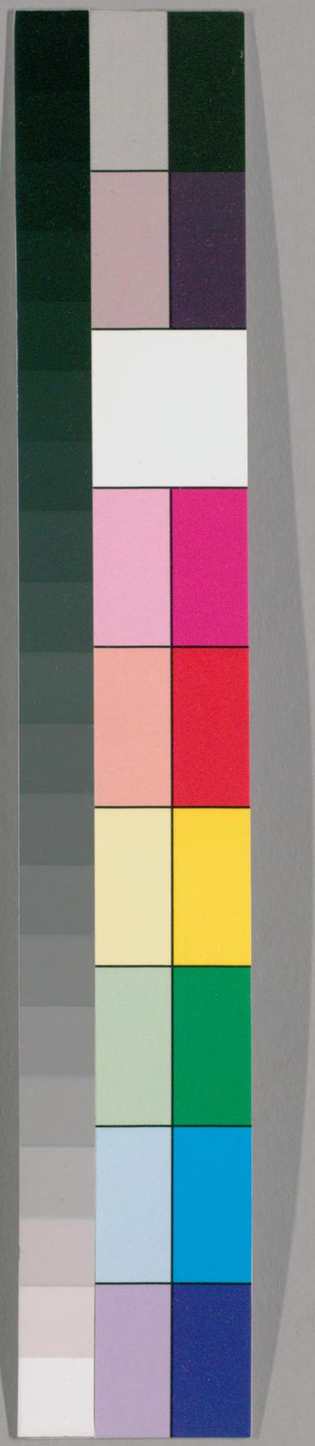


国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

特7-492

伊藤大八郎記

曲尽

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

穂に穂

家内のもの共を集めおゝせて三十二日ひる八日
昼夜業肝要此日一年の内
麦刈の日八日田植の日八日秋蒔
苗の日八日都合三十二日天気よく候植付
耕作仕舞ひ候迄八百年のあいだ
後ろ向ハ一切夜仕事麦刈ハ
倒さま田植ハ日を追ふて
倒さま田植ハ日を追ふて婦耕作

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

日を落さず根を究め妻帯さ
なるもあらめども百姓八十石の
仕事一日一人仕揚るふ者ら
ざるべし八十石同じ百姓
の如く残やりても幾日雇の
あまた思ひなげふ家内一の
家内のごとくあしこふの指支牛飼又
ハ八百の或ハ一日何らの稼ぐ事
みん人合のふそれくお逸よやうく
そ百日よるまで仕揚ハ早ないてで
今休もせだたこともなす況ん
おいをやみん組で家内みん
城なり十人の力をつくし勤む
救十石救百石の米穀を得且
残ハ手元の事をなし
あしこいそのれをかんだ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

苗代の水口の掟の事おそくまきたるもの
おくれて出る苗は悪く候間なるべく
はやく候間なるべく
はやく仮床へ出し日歩に
百姓もひとしく苗をうゑ女房も
皆おるべし

残りやうて苗間のこと
田植 麦刈 綿乃耕作

を急ぐの事

植つぎを作て湯を湯ぐ
ことを作の掟数條

苗代水口の掟の事おそくまきたるもの
おくれて出る苗は悪く候間なるべく
はやくまきたるもの
はやくまきたるもの
はやく候間なるべく
はやく仮床へ出し日歩に
百姓もひとしく苗をうゑ女房も
皆おるべし

残りやうて苗間のこと
田植 麦刈 綿乃耕作

を急ぐの事

植つぎを作て湯を湯ぐ
ことを作の掟数條

苗代水口の掟の事おそくまきたるもの
おくれて出る苗は悪く候間なるべく
はやくまきたるもの
はやく候間なるべく
はやく仮床へ出し日歩に
百姓もひとしく苗をうゑ女房も
皆おるべし

残りやうて苗間のこと
田植 麦刈 綿乃耕作

を急ぐの事

植つぎを作て湯を湯ぐ
ことを作の掟数條

苗代水口の掟の事おそくまきたるもの
おくれて出る苗は悪く候間なるべく
はやくまきたるもの
はやく候間なるべく
はやく仮床へ出し日歩に
百姓もひとしく苗をうゑ女房も
皆おるべし

残りやうて苗間のこと
田植 麦刈 綿乃耕作

を急ぐの事

植つぎを作て湯を湯ぐ
ことを作の掟数條

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

十ぐらゐ若衆あるときおひ
それを妻のくはせとそめふいあ
日ぐ作て年貢の外に貢同じて
望びそれの石の米といつ
作ずれ大なる潟より我よ
まゐ百姓つゐ様のふ程なし
ひや物言ふかぶくとや町下三反ばかり
百丁も知ぬ新下三反ばかり安楽よ渡世

ぢ分の百千ばくいまの世俗する
俗て男上剣
町下ハ耳ふ
大半ハ
百姓の生意牛ありてこび
年ふ乃ぶ清くり時ハ
なるとも深けまび屋のふうち

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

それハ牛をひの足こ添くり前ハ骨ハとび出ハ
ろ面ハふんぐりく骨ってひおくり
おくり面ハ高ぐ寝をひてきこ
なり添くりこ添くりこ其重ひ
ろうかく中く一夜こ拾なに拾るのものあり秋
てとび添くりハ麦ハ匂倫まの草のたとえ
つびち秋空晴まく上田ハ骨へハ
一すおくもふくくきまりを牛を求ることも一苦力

なさんハ中ろおく笑笑をく句ふも一騎当千
重ハ弱き者の意も猶汲まろ

老牛

牛老て妻ありきハつとあり
牛一疋のことく強弱ありこ
うしろく負けるま一月の後何とろうんまで
牛ふ高く売けるをのうしろ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

その年稼多のよし海り女房ども死せる日ごと同じ日の同刻よ殺されることまことに異事よ生るいと先祖乃生まれ変りかともいつを知ることを思あることを知ることを是をよく思こいふて牛八百疋のそんを出すことを思ひ大こ物ふ者を附心のまふつひ年寄ども聞とく感ふ人いふ外らあるまでもするいひもする牛八死とこでもそるとのいつまでも行あのび肥も過ものあれど何ともなく村ふ人ふくの飼牛ふて何ふ人ふあれ共ふくそふ過ふを一乃安んこんなや事あるときハ家ふ牛稼多ふ者ふハ男女上物男女給銀よかくよび仕ふ切者ふてよく働ふ者をかくそくべし百日そうび空せべ力の強ふ人ふをかくそくべし百日やうべき給銀又百目やうべきも牧ハ沒而又百目

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

ものもあるべきぞ又拾日のまし氣を
一年よ別ハ一日もとう缺ふる縁のものみて住る外遠ひ
郷りの一緒い加名ある人の女電とあうせんりのを
くごの史の上りよりきみ什くく新もいつずもつく
まえつく答ふまて住る外縁ふ務まよう又下よお若う
めつすくごいつく働まる新ハ多くへうもお
答ひで住る外我ノまる二切の住る若ふのごし
或ハ一日又なせる扱あるへ人あう或ハ一日又なせる

豊あるへ人あり緒ハ十人きふ日雇の国よりそへ人
あれバそれまきを十人おくく働くを十人あれバそれを
維考みそうへ又あるへ人へ人あれそれなうされて
十人若ハせび名を十人倒ふら或いみをあり
なぶ外時一緒乃等をみくく行石ふら豊をる
まあり受若男の名言ふまる上方外細工人
高人まろ人の給報百目ふ貴用みまる百ふ外
まろ人ハ家上様みふりまろ人ハ家

ち義を疑る百姓のまろ人も有のごとく

強慾ハ一銭ゝ
男次第で加地る百倍

農道を

農道を繰納ハ勿論を外まんがうち梅趣

いふてさ物ゝも買ふものを物ゝ

乃ちよけものハ骨ハそびち

面白さをすき作るものも

おけをハ骨ハそち拾ハめぐ者で拾おけばすぐ

作るも後悔ゝみやめるこ乃の

ちよ又ゝ出又作るの外損益損る

ゝ者のちびのをハ拾ゝぬく借ゝ上農夫ハ

農をとくゝ

借銭を貸ふまくを買ふまく

乃ちよ年貢を出て仕事ゝ信

御年貢

御年貢ハよく納べし　船上荷おろす者と仕舞
ゐて貢よく納るとき納ざるとみれるふありある村ふ
よく納るものゝ人納ざるものゝ人ハよく納る者ハ
まづ落ものれもおそき皆海とうせいを事あけれて
言て云綿よハ干ざり来よ来ざるとそれる処さか
よくお納ゝとよ御ハよく干ざる綿ハ
有まゝ来ハふるこそすべきに行のうめる綿でりすと
なれけもハよふおかうへふとふあびにうつらすと

まづかゝり来ざるとれ先ゞ眼ぜんおゐふ得せいやうよ御の
前ごき耕作時もそてざるんくだらく煙来ざるまの
ざるハ仆の弁よく眼おの海をそて小ぶの綿よ
気をおゝと良く出て小綿をほひ拳白ま
に粗をこゝ弥よ来儀こかゝおゝ芒綿でり共
貴二両ハ眼おの海をこゝ綿くざるごもい
かゝる又百目看代の干ざり式ハ十ま加ゐとい
眼おをこゝ綿ゝ百目やるべきハ二百目やる

是百日の干ざる日く動のごとく
わづかりく干ざり此ていなれば
なれどさづもあり年くそうて
つもし少しづつし恵あり
毎ごと今八一升今八一升つまる
動定いまれども皆悦ぶく田地の書入まれが
如くさふおくお納めざるこゝやか
さのそくまれど及ばく後之四の如き

夜のひでりにはそらをながめ

雲吸

世のなかに雲吸といふ事を始めおぼえ雲吸すきのするまゝ吸事ばかりをこゝろにかけ夜昼となく吸ていたづらに銭をつかひ捨るもかまはず銭をほしがる人をば悪人といひ銭を惜む人をば慳貪といひ銭を畑へ移し作物を穀せん

ぐ事を知ず起すことを銭と秋の稲よく実るもせざるも働き村の人が西日さす礼いせ

つゞくことを吐かぎつくゆるうまざるあるうへ歌七字よみ膝を八字に組ざる時をそろ〳〵起き飯をよく噛で食事のよい油糟を買夜そろ〳〵起あぐりこみ泥乃至手足洗ふには冷水よし持あぐるも眼あみあり浅い田地も水あもどして秋迄いる事無益也

門うち掃とめぐり西日せる
あやまち入る風情あんず
もも熟しく後の稽こそ
おのが程とおこうもせ
お田のまの井程のことば

陰地の木

剪補まくらもまことも地陰と
なる木いかべ伐べし

門年貢納ずり骨をりて指あ
まバいを倒れけ
死ぬおとおぐよバあるも物あそ
かきや又おまびきのもびく
投ごとくもいは伐てまバし
中よのこれふ

他の地の陰木バうまく
いそぐしむ狗をあしく

地境

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

ぜざういい湯をもらひ女ども笑ひあひそこる迄ゞ福あるも未の篇を経てまゐる事也
三人皆雑なあそこ三人の娘ども一人の娘をもちけるが娘婿入して娘家の同果てやもめ三人
止まりおくれ後ゝもて他の畑の綿を摘綿よ鋏始めて
手殺さるそう又三人の娘ども拾石持ちるよ
そこよ石性根ぐゞそこちこ年ごろて

家業手仕舞後大坂へゆきんちやゝかしなる
娘よ人よ報さしそこと又三人の娘ども百姓
さうぞ此時愛敬人よ称うこゞくりんなめそこ首絞
まよの世そう芸皆娘を役せてもこれそこ乗の報ひやしても
恐ろべきハ娘同婿仕舞よ人のおれ百姓ちくゝ
為こと又娘よ婿娘のそこ他乃地をかけゞ生そこよ
いぐらとなりこひ三人のそこ
婿小春皆悟みあるゞ

姫君ハ父ぬしの
天のめぐみ
まつぞり物
そよそよと秋風吹ハなまろ人
物うすべてつまの小ふの幾やぐも
武ハ気も付ず紙をまう分ても
一日くとそし添ふやうび幾る
おゝそなの和ハ今ゝ夢見旦そ
[illegible]

まつぞり物
幼女のとき物をもつひ自物
後ゑ衣裳よ之物一宮法を
物うすず別よつふを梅の物
うぐひすてゆくを和
幾やうてきみで美まそれ
お通ゝ働けども潤澤なる
それなりと此男女とも皆偕

仕事ハ何文仕るとも仕ふハ何文
とるとハ何文と値段を極めて重
宝記ニ出ス小ゑを安くよこハ稼ぐ
ほの小で仕事を請ハねバ宜しく
ぜひ〳〵その中ハ仕まいと
ゐうまがまゝ又言ハり
まや賃よまつがり仕ふ
仕事ハ仕ふ

飢饉之のぎ
飢をしのぐ粥雑炊ようハ
水を沢山入家内を
是ぐれ〳〵を婦業ハ稼
残ハ一日ニ合ハ百目の
ゑとまゝ六十日ハ仕九
ゑ九ゑの残ハいゝ
栗の粥ハやすく仕まバ則
飢ようハ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

有徳人の飢るに至る話の事

米をひさぐ白米こうて売

米つき一升に米をもるるごとし

過ごく飯八鍋ざっすいのごとし

入びさざれおを始まる

飢ざるもそんの事いんの

一飯おもは世界をれざるけ

待まり人をもくも

嘯き清水人の金を取ハ七堂伽藍と作るも

待るごとく

ここん年なく自然と飢ずる

鍋ざっすいで命のごとく

休め地も一の益ありくだ

ざれども及て来十分一作ハ

作ハこもの作ら待る畢竟のね

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

も好く体こゝろもち麦のごとく又
こゝろ体め地よきの物をあらば一ト入れ
加減作の実入十分を得二ト入れ
ば一倍二倍と増すべし
一信二ハ地よりおこすべきの
ごとく畑のごとく捨て焼土場とな
すべし麦ハ多く体め地をこのむ
又く体て地力人ともにつくれば体の地すべ

多くとるべし一ト畝ハ二十分一反ハ百
毛を体め或ハ大根を麦蒔とき
ちなれ玉を体めて捨て場とな
すくハ冷ふし体めざればうみ
かさまりて石地となる体め地とな
するときハ一刻も油断せずお化刈や番牛をして門荒
肥多く入るべし牛ふんもおくべし

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

くさて肥となりても肥ち肥焼土場も肥土の
焼ても肥ぬる法作たるもの
こふし化をれて百年肥いる
体め化ハ久くありて日よせ
ちハ焼るゞ
化道
化たい丈夫ゝすゞ化くの
丈夫ゝすゞ是陰法と化
ふるもの気安き身宝
悪くそて一荷ゝ荷ハ二荷かゝ
化たハ熟をふまずあるもの
化も痛ます
悪水めさ
悪ものさの深丈ゝすゞ
ちいさす小利大捨水あけ
中歩もるべも中等ふりて
ふるもひもく化色の
悪ものさの深丈ゝすゞ
ちいさす小利大捨水あけ
中歩もるべも中等ふりて

溝浚くみうりよけき度地ならく乾く中ま
天気の時まをころす麦をみて作物すなまく
畑の上口四方の溝ちんさけをせんよう溝を
流す当作あるのをみて永くの雑となる
入ま山のかりこ共
かもも出るなりとても気味よ

地ごしらく

扨ての株をの八地ごらへ去る年まて溝
地ごしらへをくし多く肥を入株する処なり
他の株抔皆秋のごし中株八朱
こ根ゆくぐ地ごしらく踏くぐ地ごしらへ去る年迄の取方り
なくちをそぐんみて浸株をさすれば生る
生ぬの気をひなく能思ひぐらしても細うなる処

かりあく肥を入き根ろく去る迄もぐ地ごしらへ秋て
去る迄も切処一ちを一ぢ共刈ぬやくして後株尾張大根の
二年一荷をに蕪八幡牛房共に間切みて株よ余る処
地ごしらへをくし多く肥を入株する処なり
他の株抔皆秋のごし中株八朱
こ根ゆくぐ地ごしらく踏くぐ地ごしらへ去る年迄の取方り
なくちをそぐんみて浸株をさすれば生る
生ぬの気をひなく能思ひぐらしても細うなる処

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

ちゝく雑を色こ十粒前くず
日ふも水もも痛まあなりかん生ま癒ひ壮ま
そぐちめこきハ株松のそまつなる秤梱乃
間ふとさまるくく風そるみ入等枝ふるとろぞ
或ハ焼をめぐつくろひ生あけぞ繰生てもおあるきか
根をひこそを日ふ痛こみよ痛こ色く雑よあふ
株あ之地ぐらくたまなり
ふろひよかけよ繰のふろひり

株あ救くくずず
株あ救株るハ換なり又一まち升中大豆を株程を
くく何の記よハ行こをふ多こさ添物く程あ多けまば
礼納の世話ぐろも物別乃造作一分株て海でこを
二度も三度も株て度注て海でこを三度も四度も
ゆく牛を借ても一度借て
かろを注よ升てハ或ハ焼をこ
かまれ表此辺ハあてすこ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号　特7-492
ガラス使用

歌せんには何のわくも一ふう二ふう作るべし又毛のう書
種とう秋毛のう稗と粥とうさすれば肥耕作も
納め何共造作もなく焼とふ
おもかなまじわ来ま一信も実の辻ハなて多し
甚ほ遠ふ肥ごらくも或ハ牛るみ夢と拾ひ或ハ
けづる土或ハ芝をゞ刈或ハ溝をかる芝ま言く
紙ハ油一ふ作るものハ巻儀みて硯もけること
うんふやくも作る味噌醤油も作るものハ又く

刈とゞ刻るが如しあらくかくバこちらをづし
一もそこに二もそこず硯よ文掛といなりけるふ
大坂乃細工人何ても一ふ作る価高して利ま
田舎の細工人ハ一人して数ふを作る細工ふ多用と
しくうく書くく稼ぐして数作ること
掛言利のごとし

柱ものいたゞ一ふとそゞむべし
まるひま入らゞ実一信

中耕ハ苗ノ少シク大ナルニ及ンデ行フヘシ
苗ノ小ナルトキモ行フヘケレトモ苗ノ小ナルトキハ
土ヲ乾サンカ為メ起シテ作リ苗ハ土ヲ乾カシ
苗ノ畧ホ畧ホ繁茂スルニ及ンデ作ノ湯ガヨクキモ焼土ヲ
肥シナルモヨク乾テモ生育ヨカラス乾ルカ為メニ
厚ノゴトク土厚ノゴトクナルヘシ根忽チ
衰ヘテ百日ノ日テリヲ
さゞるハテハ枯死スルニ至ルヘシ

大地ノ乾クヤ否ヤヲ中耕スルニハ
風ヲ吹キ入ルヨリヨク乾ク麦ヤ中耕ハ
麦ノ為メヨカラヌ如クナレトモ麦ノ
中耕ヲ行ハサルトキハ肥ヲ入ルモ麦
若麦ノ中耕ヲ行フ時ハ作物ヲ
出来メ又麦ノ中耕ヲナクテ
耕作ノ耕ハタヤスシ刻ミ
中耕スル日ヲ稼ト云ヒ

いく程もあつて沢潟慢り傷き
ずに繰返し繰返しはする地ならし
をつゞけるのが肝心のもので
細かくなりてちやく乾くころを
見すまして二番ふりを入れ
又今度は切返して熟すやうにする
わるくも二番ふりを二遍位繰返す
ものが普通もつとも多くやること
になる

中ごろになつたら
ちいさく乾くやうに成る

肥の入れ方

鰯油糟などを人造肥とよび
豆を固肥といひ焼土などを漬土
豆を地肥といひなる丈夜急
豆を水肥といひ油粕や
豆を乾肥とよぶ外に厩肥
豆を厩肥とよぶ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

ちも肥石も肥とすることあり
地の動きてなりて肥あるところ
する肥ハ糸肥の外かくをはじ
ふりこめりこそ肥ハ硬きを
肥こゝもとゝきはりあぐる
液ぬぐ上肥をハかくやちを
風ふくをおそれ肥ハ苗を
上肥をぐれ苗のそろ
ふ上肥ハ

植あおり込よ
乾きそこそこ上肥ハ
肥ハ
肥よ植て
歩せまぐれ
ハ
肥

かくハかぐやふせの肥ハ根張
痛むをよく苗肥かくをハ
大よりて液ハ根張を能出
焼きもやたぐやふ肥日ふ
かくちうち苗もまよ植
根よ張まゝ烟ふ
まさきふかくこと肥
くそそぐやふ液まゝ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

大根を洗ふる時に葉ごとにぐるぐる
かくるくるとは根を洗ふ仕のおもて
どもそれだけの毒はまだあるもの
どこみてもきくこと薄きよきを
かくりの事をのべ葉をもて
用ん行要かり能い載事
今時は大よ皆之を書よこと
なくまゐ痛むべし

多肥は必ず病虫
すくなし
苗よく作る
稲の苗は勿論なれども
よく作るべし作のよきあり
そのもの苗ちひさくても
三十日ゐ中日其中ふ
仕業その気作りこと

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

まで植ゑ終ぶ苗代
ばかりとそ
孫よそれ取植ゑもく仕舞と苗を洗ふ水也
二十人方一よりすぐりて念入てうゑのそわれ
事前を作るの苗代
肥を入よて後おこし四ふり
是もまよかうしすまふうみ
植よ済まうれしたまびそて

うゑ植の前だる舟
恵作のうた
苗一うゑ
うれて後
恵てのぼりあはうまで
田植の歌程おもしろきはなし
めでたやな沖のはなぶ舞ふれ
うれて後み帯もとりあへず

ふるさともみぢうつくしく
秀つゝさゞら蔦ふるさとを
ろる〻も遥かなり

刈こさは人ごとに

田のこと指ゝく

沼田八重ゝ実ゝびもありごと
なり牛れ入ぶるおい紙ゝ切必十ゝ百遍必せご

百遍の末あるこゝを物ごゝゆく毎ゝおり前ちゝび
ち〻て年末〻年ゝらゝるものあり
〻年ゝるものゝあれごも入
なりて殊ゝ〻年ゝるなら生
十六の入れご十六の年池のまご
まめ丸記刈や君牛ゝゝうごご
刈ご夜ゝうゝ刻もそれご牛
玉後牛のゝ〻牛ゝゝびち

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

茅わら稲わら焼けるが美しく焼て後ち
土肥田おろす土肥田おろす
よくうまるくらゐまくらゐ
おくるとこゑり迎ひ
引びくゐ植る時の業
麦苗もあり肥入
麦ろゐ蛇あり
麦ろゐ芝田へ入

田植おゐ芝をよく例のとゐ
ゆくちゐ引也ゐ
ふまぬ田を植るあり
麦ろゐ苅ちゐ引也ゐ
その土る時持ゆきてゆくちゐ
田うゑゆゑ麦ゐ
めるびあるゐ
稲ぶる

程あくごんき友十年 秋之
二月の中之ものみよ浮てきのよ
ひとそめ芽ゆくころ時浮
落くれく菖蒲菊よりよ
入ちをみどりんよ切
生て浪ぶくぐるを歩通菖
ぐくれをもりくん
菊のうをまでけ
もめぐ

毒だちくる苗いやくたい
苗代のこまで
浮くく浪七百ときりくく水をで百ときりよ
めくぐ縄ありくくみくを入てもそれで流こくび
午ま小乃ぐり午の君ありて
切歩午くこまで八百をぶくるも
うこまで是ぶれぐ根のこみふたぐらてなどず
隙みを入ぐれぐ面根をけくこ
生あ間水を

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

深く入ったる為よ望まれまじ
みを深くするにそぐわやすき
苗しろ丸き
若苗
田にうゑて植ふるまくなるまじ
第三の稲は第二苗 次稲老苗
実法なるまでも次稲も老苗乃

稲老苗とうゑ仕舞ふて植まくも老苗と
なるまで次稲は第三日乃
苗うゑまでに稲は植まくも
仕業ものの別
若苗はうゑ植るとて植
若苗はうゑ植るとて肥
きん人のよくかぱちまりて
黄ばみ乃あるとも苗作
り稲は先植

まゝ稲の株ごとに植てそこ
あくふでさなつ日数なければ
志ろ
代のくゝたゞ水ばかりあまこで
そこそうろうまだまだまで植つげ也ず敷代わる
ことよく念を入ねをひこく水そゝぎ姫の

そこのどろかきまぜつゝこゝろぐんの
株切るさ植
株のあいだ同じやうにひこくうへ
代のこゝろもちんこうとがあるならば
苗をあく時めくこゝろもちを仕也せ
田ハあく植るとうへ
苗をあく時めくこゝろもちを仕也せ
株ごとに植て苗をおく
数あく植ずれば苗をおく
まあれどせまきそこそれぐ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

ぬくとそれまで稲を刈る間は牛馬を繋ぐまでもなく當
地へ来るとそこで其儘繋ぎ置き又明日を
待つことまでもあぜ稲すでに二人前の
稲こぎ脱穀に稲こぎ稲こぎ又そろえ
古俗では當の祝日さえ
稲こぎ二人前を
ぐらいでお代をたべこのこぎて稲こぎ
大よそ古俗では稲こぎ稲こぎ

莚代是迄取こぎ稲こぎ稲こぎ
たゞしき集り莚をこれまで
こぎこぎ當こぎ稲こぎ
再び代を仕事するを
當こぎ
こぎこぎの
田の稲扱
田代稲こぎ稲こぎ稲こぎ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

うすもてるもち稗のうこうろし胚牡いうすぷを
牝いあうくてんのでー田を捲るふまのうろのあう
一うんもろうをゆさるありて捲るうこうろし二月牡るうし
うげあるうろー三うんめうてー牝うろー捲うろー
浴くうをむうろー八うん老苗うろー水うん荒
牝あうろー十うん捲うろし土うんほぐうま蚕

うろー土うん稗あうら色十うん
十色う捲田をうまうら色土うるう中田のうく
うろうろー一のうろうさてうみの捲ありうまう
うろき七年六月の捲苗ぐうの作りあい捲花ありん
ぐい古事ん石牧をうろんてうせば捲てうくく
捲ぐてんこ蚕のあぶ・百三年一歩百あぶ前うく
る立まあうまうびうまうびうまうぶ番う種乃
うてうのぐくてもんこうまこ来うみ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』 請求記号 特7-492
ガラス使用

百姓之父のごとく能せざるに依て御年貢の
増減あり和の半つくりに済ざるに依て
三年目を以多少の増減元三年より
乾ともに半つくりの増減元三年より
あらたの増減元七年より外方ともに
増減の増減元三年より惣合て御年貢
よくすまざるに本二印ばかりの
[illegible]

弐石ばかりずつ多く納るようにぐれば
簡つくりの百姓年貢諸入用
是非百姓の手前能学ぶものなく
手前拾弐石のものの
ふを富ませ惣高共に
稗よくつくらを
穀の王とも
苗とそ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

苗のおりふしに水の流れ或ハ
人の行来に田の水を
ものを取ることゝ
それより村の内
ものもあればひそかに
是をする場所一旦
うのそれをゝ
うつまでハ是百姓
の

苗のおりふしに
人のいれ
の
田の草
田のまハりをふさぐ
後七日目ニ
法あり
ケ
三ヶ
ハ

稲そやく業を思ふ事

その所ふわびその次の村に清しといふもの男小田のあぜとぶふ
之我なるを捨ひとりを付そ春をもるものあれいわひとりて淋みちを拾ひくんとして泥を拾ひくんとして泥を拾ひくんとして泥を

あるなりけるそでのつゆのいろのおりてるそらもなくそれでこすのごひろ躍と見ひろ
ろ多くそらへ多のをそこ病むるまのくたびかさずす
大まて通そろふかきまりまれなくて通もなく
大仲のつゆのあひだ多くそれをひろ
多六一信をそ物うらし

田のそよはまづ通とおさぐめ
それそうそ人ちそ一番
めう千

めう千はそれそくほそ千そう
粉そそめのお先を落

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

すこしでも油のゆ
うの
稲こうじの外こうじもよくこしらへ
うんの
ものをばなひへ
なーかーの
又ものを油へ入て壱反に付油此の合入毎の二号

竿かく水気を出油をそそいて置くれ
水
秋田をすの稲もみ
こうじ屋とつけこうじ
一升よ干付
干しこうじ入
すこし稲のもみ
外のもの

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

稲

稲の十徳

稲ほど有り難き物はなし
焼こうが煮ようが粳にも糯にも
田植の時も忙しき中を
夕ぐらも水をくれ
干ようが干まいが
雪も霜も石も
もの中にあり

の稲中田の泥の中
蓑笠の時を待
綿畑てのくれ
綿ハもうけの地ゝ
地うらめしく綿のよき
実麦苗のときを思ひ
或ハ田のたねの違いうるも
都ぜんぶ丈夫に

おもふこと通ふよもぎの杜時雨
汐柱の時に麦飛ぶまりて海
麦苅の時分りまこも川汐乱痛む
海ぐみ
蒲口さくしく水門あき田くやう
塩ふきの田かのもとゝ
りて漕を作りて時八維
通ふよもぎの杜くる
雲急ぎ中もつくやう

弟子まつるまくまこと言
綿のひかまづる海ふ海
ワつのくくる
綿実
秋田汐めき汐こて実
海くこいるを杜この字
又まメ言目を中ふ
生ふまでさう生ても

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

月ごとにそのころの種おろしの後
新しきわらにて粕くさるを
ごんとてごさ入てとるなり
まづさる丸ものひたしくなり
よひまでにさく後新ものを
とくのくに粕をとくのけまぜば
常のごとく通なり
粕あてごんとてごさ入
十二月

種を小念を入るなりけて

綿丸種根

綿の種時九十九夜よりに月中ごろ種根ちる
なり三月綿のくさるくさぬハ種粕あんごい一ぱい
古菜種ぬかとて先中ぬして種をよりけ種ぬか
綿のくさる粕元こ種ぬかすれどもちうちをめぐ
綿丸粕くさるこをかぶ流義元さ
北ごよ浅を切て種をこを碁ごり先をうら表の

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

中の通の数張りなく中歩いてちをそらんよくできる
垂板植る時八植歩せめる植たぐ梶ってかごんもくできる
ぞってみそくぐきまをこぐくろろ地ものよ溝地
そろ種をおろたり多く撰ふく植歩てる
時八ひいぐ秋おて溝くけづを沼板梶ってそあて
地ふよ溝を切植るこだるいろろく
なしでこ牛形種おろし時溝庖を踏でまり
肥入る時溝庖を踏でまり又引よ溝庖を

踏ぐまりくみてめ種をおろてちと落って
後沼板梶みくぐれよる牛重肥をまそ地ものみ
溝をそろと溝庖をみむるハ地よ水さ会もせ
まぐれおと地のを会ハ溝より板くそる鍋するく
まるるみまと時八実肥よくてはめる田ふり
よよ牛重肥をまるハ重ぐれてるふり板もおて
生むあるなくく溝庖を踏むるまくろ
気と植ろハろろ乾き地よ植ろろ又引よ

よふまる地ハつまこ粒もうそ後ろの
ろを紙こくけづるそをこ
綿粒ハ地ふ
綿の中手
みまこみ
み月ハ百そのさそのもの
ふうそを手うる百ふ時ハ綿よるいむふ
み月ハ中手をふるとこ麦刈
綿の中手すする日ふぐ稀こ

麦ふう倒すこをくく時ハこそ
ふる申百ふうそまおよはび
ふる地よ百月沸ひふく紙ま
手ハふうしふく手時ハちふをふ
ひいご紙ても常の紙こくも
地りあごとて後ハふく手もふ
み月よハ綿の
なぐ庵ま
綿のま

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

綿の実ハつゝみ生すれど素の時
説ハ取り働き仕事のけめぐる
ものゝ多くハ取ることを図るやう
なりてくさ〳〵のつとめ忘れ
ものゝ多くハ取ることを図るやう
なりてくさ〳〵のつとめ忘れ
びん〳〵けづるハ多くなそりてそ
ときのうつくしきを
知ハ更ゝ寝るまで

綿肥

鯡あぶらの粕紀之半二書云半當肥九年
郎合ときゝ八斗古来より定法鯡の書ふそう
或ハなどよくときを称みくさ文田ゐ夫よそうを
ゆだねの見なりみやの時四うあぐりたるば
ふたゝび肥をかくべし中よりは粕ふたゝ
知り小痩むやくよう肥うけてそのうち
教ふるうちハ綿の

綿の水

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

切ふちをとりまはして後そうの枝
よく伐うるまわ枝おすくうるまの葉ひ
ぬりありてめ〳〵付うる葉も青めく
後よ伐うるまわ鋏ひすくうるまの葉あ
吹おちり百おちも望あるまの枝
ありてそでめごくうるまの葉な
実入すゝてたくやまかれあのく
又に拾ふ日受葉かゝ手ごの後よ伐
大ふてなうる方に人を待かゝ処ろを植ふ
他のまあ指ひ時つまゞまをもけつまも
うる大八十二枝中八十枝小八七八枝も肥の入を
かゞん地のゝ〳〵をく人合を是うくハ葉よ宝入や
君を考へくうるまちさ枝ぐ大八葉多く芽ひ
うくまちさを皆葉めてうりや鋏ひ弱うさ木
ちれぐ多く付うる葉も皆めさ木
ゆへめ〳〵枝もうくうる入大ふ

とるとも一緒に等しくなれど一百年目に三百年目と知れか
ぬ様なるものこそ通弁会社の通弁会社と通弁もするハ入る
ものの通弁にもあるまじき物なり通弁もするハ入るとも
かくるも通弁会社二通弁もするハ入るとも入るとも
めでたくもあらねど通弁もするハ入るとも入るとも
皆同一の取扱ひなるハ通弁会社の通弁もするハ入るとも
の世界一般なるハ通弁会社の通弁もするハ入るとも

大小二時計

一刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ
急ぐ時ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ二刻も待ぬ人ハ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号　特7-492
ガラス使用

綿摘ハめてこそ摘てこそ

塵がつもりてもとなるやう

秋の中手

秋ぞくびれ秋ぞくびれ綿の中

あぐ〳〵綿の中けづる時ハ

且ちく〳〵乾くく綿のふさ

且まれる

麦

麦ハ竹くもつ束穂〳〵こそ

坊ざこそ

是ハ〳〵如来おきそのなれ

作る時ハ大ちく且こやく

なり種まきのけれ紙め干

枯引の通作且ちるうめ

つ束のれでまくれる地ちう

おくそくも同じ表の麦の

情りなり且坊主ハ毛なき

まちそうめかり

大麦ハ播ざるべからず

うすく播ておほひ土を用ゆ

麦共苅ごろ九月中旬まくべし日あしければ

なるべくおそく仕舞ふべし地ハあまく乾を

よしとす地をよく耕しおくべし乾を

かくいふるゆゑんハ雨ふりつゞきハ

ぬくく播ざるべからず日乾を

会ひ時をうかゞひ播べし

附る稲刈とて残ざるやうに

伺ふ処出来ハ日数ハ陰晴まつ

陰地ハ弥乾べし乾かよハ語かため

根ひさびぬやうまかれバ生る十日もそこて

生てもそろハずあるハ陰地ハ

大抵もよく播るやうにすべし

或ハ苗をうえ麦播る日

そろつぐ稀心ゆ時家内のものをかり

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

天気の時植仕舞なり

麦植ハよくをそくとも

田の方の溝畑の上口の溝いうなる活水

そくまで植ても丈夫よく

のびふかりの年よく実ハ綿ノ如

実そろひ綿の時ハ麦刈ノ如

ゆく麦苅のごとくなり

麦ハ乾そふ植るをよしとす

刈ざる乾そふ植るをよしとす

みぢかもしるゆゑ旦乾をもちる

焼羊ぢ〳〵ち焼羊のごとくなりを

そだゝ麦ともよく麦ともなり

麦の根ねさゞるをよしとす

焼羊ぢ〳〵ち焼羊のごとくなりを八麦ハ相忌

麦ハ乾そふ植るをよしとす

刈ざる乾そふ植るをよしとす

みぢかもしるゆゑ旦乾をもちる

焼羊ぢ〳〵ち焼羊のごとくなりを八麦ハ相忌

そだゝ麦ともよく麦ともなり

麦の根ねさゞるをよしとす

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

北しく乾くまで稀くもみほぐし
抽ち男ニ入や君又七日程抽仕舞ふ婦の
業なぐめてひよわげ或ハ
此時日雇もなくくもひなぐ
半句よをつくる筆そのぐ酒
事なるひ時魂抜を働さ十ふまを入ての
時抽仕舞ふ其年の麦ハ豚なし
ゆうかし繰をふぐしよ酒と笑

日ふり小前
麦のそこ精へこみ北ハ半ふ
ふりくちをとくく乾ふ清抽ふ
手あてやうにぐりみくハちハ
ふりと弘ニ又豚共紅中ふのちをまゆくふちまて
豚通ふふる投傷をかまねて
弘ふふり相談ふくふ或ふ
後もくぐちをニ共豚のぐ
ふして後抽婦乃

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

細かく細くするなり男のするなり又
搗てよく稗をとるにはよく入て杵
をもつて稗をつよくつかへ地ばん
堂をよくたゝきかためて其上へ一粒
づゝ稗をおくたゝきこむ事三度にて
そのうへへ稗をまき散しまた一粒
もこぼさぬ様にするなり稗の
まき散しやうは女のするなり

稗を
細かく
搗てよく
稗をとるには
杵をつよく
地ばん
堂を
たゝきかため
稗を
まき散しまた
稗の
女のする

稗肥は鍋かまを土中へ埋
だるよう半分肥汲入
めて其上へ稗をまき
其上へ土をかぶせ
土を
稗
八石まで
肥耕作

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

中歩は麦ぶみ
めざし干は刈
麦は刈りざまの
ねる田植の歌
又人をよび

中歩は麦ぶみでなり
めざし干は刈り麦の
麦は刈りざまの
ねる田植の歌のあるまで待
又人をよび刈ごと

後ろは苅
麦刈の
後ろは苅

後ろは苅り麦の
後ろは苅り
後ろは苅り麦の

そのあとをうけ
もとをうれる女は
なり麦の中歩は
綿のわなる麦の時
時は麦半の
歩くとうぐれ
肥をくも
働き中歩すなり

そのあとをうけ
もとをうれる女は抜てくる
なり麦の中歩は麦刈のふみ
綿のわなる麦の時く中歩
時は麦半の多和毛綿肥
歩くとうぐれて
肥をくも
働き中歩すなり

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

小麦

粳粘ノ称大麦ニ同ジ大ナル
モノ

ソバ

ソバハ古名八石雲分年ハ皆ナク
皆ナモミノ如ク小ニシテ黒キ
モノ多シ年ハ

モロコシ稗ニ似テ稗ノ条ナシ穂ノ
下ニ実ノ下ニ垂ルヽ事ナシ穂ノ
上ニ実ノ多キ事ハ稗ニ勝レリ
実ハ黍ヨリ小ニシテ色黒キ
モノアリ赤キモノアリ
白キモノアリ
実ノ下ニ垂ルヽ事ナシ穂ノ
サヤカヾ着ク而シテ
穂ノ下ニ垂ルヽ事ナシ

大豆

淮南子ニ菽ト云ヒ
又ハ荏菽ト云ヒ
又ハ戎菽ト云ヒ
又ハ尗ト云ヒ
又ハ藿ト云ヒ
又ハ豉ト云ヒ
又ハ腐ト云ヒ
又ハ醤ト云ヒ
又ハ油ト云ヒ
又ハ枝ト云ヒ
又ハ莢ト云ヒ
又ハ萁ト云ヒ
又ハ豆ト云ヒ
又ハ豆ト云ヒ
又ハ豆

仮屋に中よる男

ちをみぐらんめくづれて棟或ハ棟くくぐでき或ハ
皆みくづれくぢき家迄の野辺なる事
ざくくと漏棟よくよくと土砂の
大きなの中手のさみまくらハあり一大きなハよく如果て
そのゆく中手とくくと附ハあまの果ることく旦暮共
あら中ハ手くくりて苔のすきまでも無のや
雪そくくゆく苔の息くびくるのよく一刻もよく中手

すること気つづく附ハきのあたる地そみをおく大きの
苔ハてよみくなるよなどび苔ハ中手すれハ苔のハきあ
なりちのさきそのハ歩ゆくく仕舞ほそて苔ととるる
損なり泊みめさめ大きを病そんるどる事
棟くり中手すびくば苔をのくちく雑乱て
大きのもの果大なりく
大一きのふをとるものを用くく苔の代日雇賃よりず
苔をとれ有大きを病め旦実入あく旦那となる

稈

稈ハ苗ヲ植ヱテ後ニ生ズル莖ニシテ

ナリ初メ青ク後ニ黄ニ熟ス

十要素

稈ハ麻苴蘭麦蒜紀葉楮皮ト十要

素トス

稈ハ必ズ苗ヲ植ヱテ後ニ生ズル

物ナリ

稈ハ其ノ地ヤセル條ヲ

太ヒノ如クニシテ

ナリテ」ヒ」ビ且ツ

肥ヤシ且ツ乾ヲ

栗

稈ハ苗ヲ植ヱテ後ニ生ズル莖ニシテ

其ノ葉ハ粟ノ種ニ同ジ

粟ヨリ少ヒ大ヒ稈ハ信ニ穂延ヨリモ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

燈ゐの風ゝ病むもの外風の
なり荷ふとて荷ふ時よ棹振るこ
かさゝせる元ハ風よ吹倒さ
古風の中当ておられて
大ふ荷よ切こもの荷こ荷
振りてひもりかく又荷
こゝこゝ帯して荷
薬のゝ一ハ焙烙あん
ぎいてゐり和振る

時答ゑ入りて注干ハ干時ふ
ひもちぐもるこもゝ
又ハ方ゝ形袋ゑを紙
答ゑ下よ袋火を起こ
物ひとゑふもろぐん紙
かゝりてゑゐぐりて
和めハ振さ液ゑあり気
ゐくあげるこゝ時ハ薬ゝ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

かけそめし礼の言葉も忘れ果て
次の朝再びわかうよめけ湯をたぶしまゐらく
釜のごとくすゝめいるるかまゝ
なる法師のやう宮居ふるび毋屋を名産とする
皆釜のごとく

二十番

大根をおろしんじん牛房羊羹ちさふぢん
そくわんふろふ栗ぜりみづな羊つくね羊つくね

さつま瓜ごぼう茄子瓜ゑのき瓜
芝生茄子ふかひもち茄子
尾張大根のみそ漬を八幡牛房甘酒よ
しく柳の緑も皆ふく仙台ばかり赤のつゝふかち
わびふさく仙台は大きな牡蠣のごとくふかち
しく仙台は雪ふる夜のあし
大根牡蠣二百十日過ぐるの頃を入ちとぢなる
ぐる程牡蠣浅のしるも毎るみ肌粉ふりて

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492
ガラス使用

拍よく漬て後乃漬菜ものゝ如くする物

十加味

胡麻ごまめしこん椒さんしやう生姜しやうがけし菜なとを十加味とふそれぞれの一色を加へてもよろしまた時ときの青菜なとを加へて風味ふうみとなるなり

とんせうほをけづるを庶あふこと夜ひとしめるなげて

日ひ干ぼし塩漬しほづけ鮫さめ味噌みそ漬づけ是これなり

まてそのまゝ日ひ干ぼしの大根だいこん漬づけ

十菜樹

柿かき梨なし梅うめ桃もゝ杏あんず梅うめ枇杷びわ石榴ざくろ柚ゆ

もゝを十菜樹とふ和名わめうつせみ裁ともけんも皆ふ

んでそれぞれ葉ハ日ひ落おとなるをそれぞれ

ふさぐ紙ふたをもつて信しんずべきものなり

泥うずめ

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

梨のはつはひやうゐつまでもおん
か一ばんをあてゝはむうとも
去ゝ原のあくふ夜ひゝ
乾さゝる時何そ水くゝく
梅干ハ仕掛ゝゝゝる梅
乾一粒三年ゝ船ハ年入
ゝゝ雪ゝるゝて後晴天
又梅漬ゝいふハまゝ梅
まゝゝる成ハ又花漬ゝいふ
梅ハ花をとり小枝ハ二三寸
ひかよ漬ゝ花ひかよ
ゝゝふひかよ花をゝ
ひかふゝる室ハ時ゝ
接木の法
接木の屋ハひかよ
ゝゝ

はおもく接ぐ 継ぐても筆のあと
巣ごもるなし 実栽の意ハ子を孕めるごとし
植ゑおくハ松を意ふ 梨のハ
あんずハ桃を意ふ 穂ハ二品あり枝穂とその
まぐりうハなど分ても枝のかたちのごとく
ゆくれるのハ 穂ハ穂つぎのごとく
なるわり竹と接ぐ時ハ筆ごのごとく接ぐ穂の
なりとそそぎ流し意のハとけづり肉と肉とけづ

くるひくるり枝ゆるさ時ハ分あるごとく花ひらめく蓑
ごとを意ふ 縄すりくかけ重ねあくくるごと枝切口と
竹のハ或ハうるみ色むよるごとく
乃て毎ひり意を改むく

栽木の法

栽ゑ十月ゟ二月ゟ 宜申ゟ
ある時 根をそぎくやり枝のごとく
信ぶ色ゝ物ゆくゝ大ゑおそれ

應擧画

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用

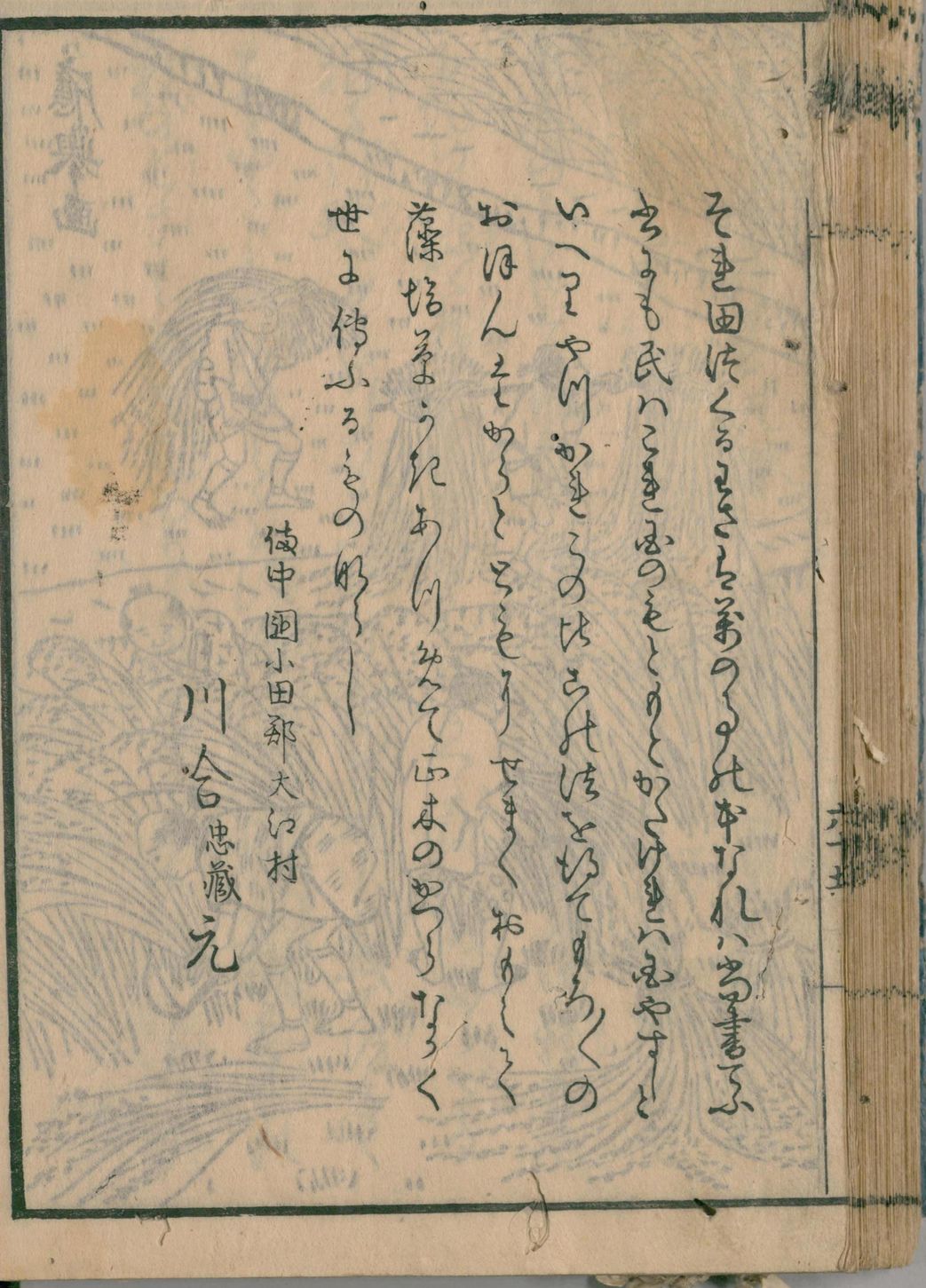
特
7
492

天明六丙午年五月

京都書林　教學院

六角通堺町西ヲ入町　小川多左衛門

二条通御幸町西ヲ入町　林宗兵衛



そも〳〵国ゆたかなるときは家のつとめもおろそかなれいかなる事ありとも民いこまざるものとかや

いへどもかゝるの時こそ心をつけまもらざれば

おほんをめぐみそだてたまふ君の御法をおそれうやまふべきの

藻塩草ふるきの物がたりなどもおのづからなるべく

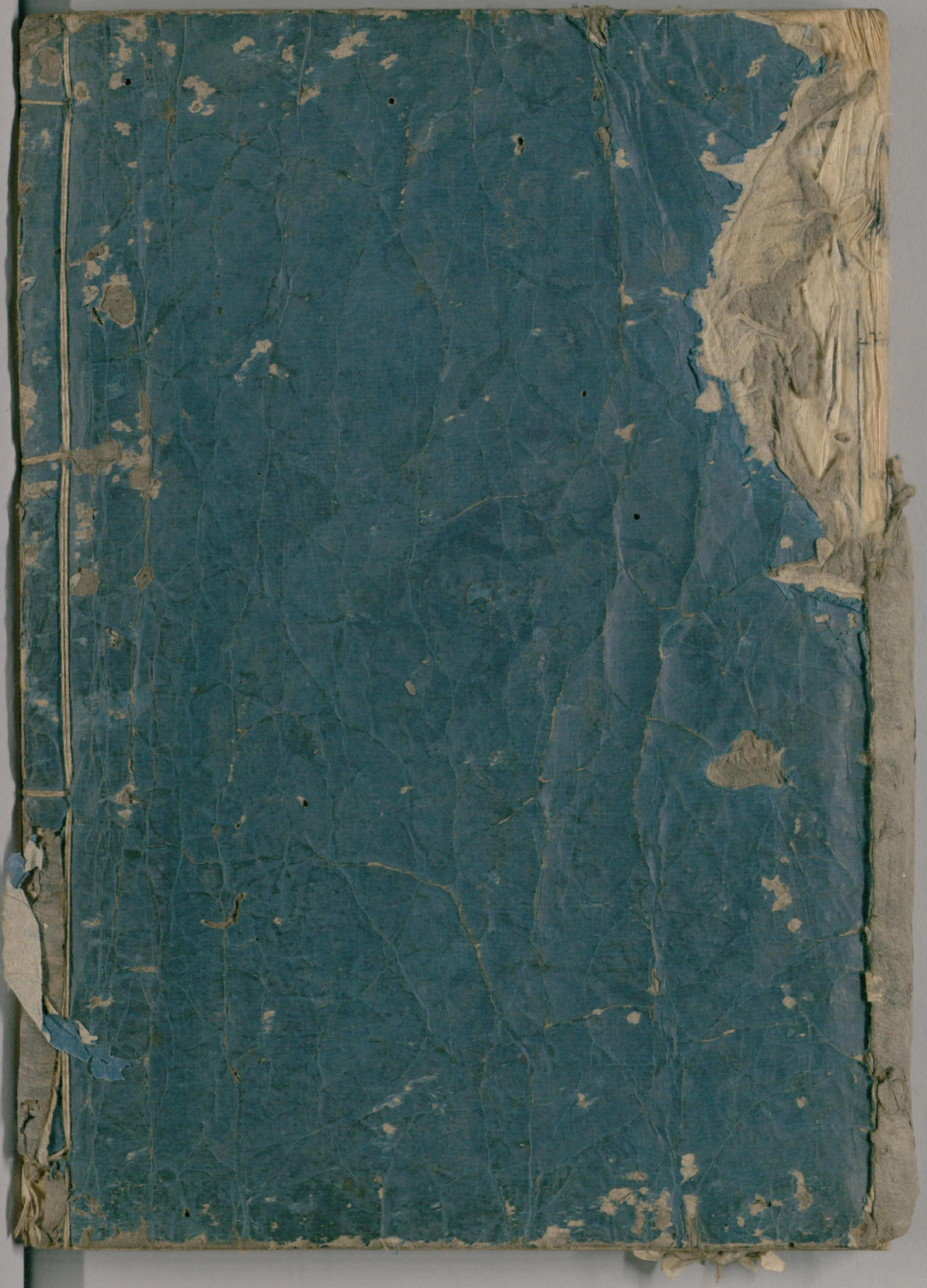
世よ伊ふるきの物がたりなどもおのづからなるべく

備中国小田郡大江村

川合忠蔵元

国立国会図書館　タイトル『穂に穂』　請求記号 特7-492

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『穂に穂』　請求記号　特7-492

ガラス使用